向日葵だより
黒沼共同会計事務所
Kuronuma Accounting Office
あなたの快経パートナー
第３２１号
2024年6月10日発行

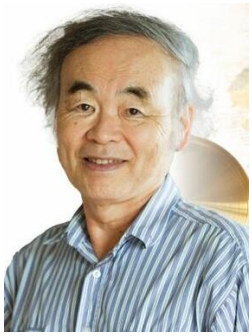
「自らの頭で考えないという病」

先月末の「朝まで生テレビ」（テレ朝系列山形テレビ）を最後まで見てしまいました。田原総一朗氏の司会の下での今回は、円安・物価高・生活不安の中で、ド～する？日本経済ド～みる？先進国最悪の貧困率この国はホントに経済大国なのか？この先の日本経済はド～なっていくのか？など時流に合ったテーマで激論が交わされました。多彩なパネリストが出演する中で、自ら「山形県河北町の八百屋の娘」と公言する立憲民主党の衆院議員・経営コンサルタントの吉田はるみ氏も加わっていたのに驚きながら、（シンガポール航空のCAも経験したという）彼女のご意見を拝聴していました。

吉田はるみ氏

討論が進むうち、1年以上も前の月刊誌「文芸春秋」連載の作家で数学者の藤原正彦氏の論考（2023年4月号古風堂々「自らの頭で考えないという病」なるコラム）にて尽くされた内容とまさに一致していることに気づきました。

…文明が進み生活が楽になるにつれ、人々は辛い我慢から解放されていく。…我慢力を失った人々にとって、本を開き一字一字追うことはテレビやネットという受け身の媒体と異なり苦痛である。…人々は何か解決すべき問題があるとひたすらスマホやパソコンなどネットでの情報収集に邁進する。学校教育でも、自分で深く考えることよりグループ・ディスカッションなど共同作業を強調する。いろいろな情報や意見の中から選択する方が楽だからだ。…しかし、ネットやメディアに氾濫する情報に身をまかすのは危険である。真偽ごちゃまぜというだけではない。（山本夏彦氏は「三人集まれば文殊の知恵と言うが、バカが三人集まれば三倍バカになる」と喝破した。）…我が国では１９９０年代後半より、金融ビッグバン、新会計基準、市場原理、小さな政府、民営化、株主資本主義、大店法、労働者派遣法改正、郵政改革、緊縮財政、消費増税など劇的改革が「グローバル化」の名の下、矢継早に登場した。（当時一人勝ちの状態の日本が冷戦後も勝者となることを許すまい、と決意したアメリカが我が国に仕掛けてきた戦略の一旦だったと思えるのに…）…情報空間にどっぷりつかっていてはこうした基盤は得難い。ますます自らの頭で考えないという病に陥る。…政官財のエリート達も同じ病にかかっている。…先進国で我が国だけに見られる二十数年のデフレ不況の真因や打開策について政治家は必死で考えない。…激しく進む少子化についても真因についての省察はなく、金を配るなど小手先の対症療法に走る。…実はデフレ不況と少子化の本質は同一で、「今日より明日は明るい」と人々が思わなくなったことなのだ。…個人は消費を、企業は設備投資を控える。…正規雇用者の半分の給料で雇える非正規雇用者が、全雇用者の四割近くにもなっている。これでは結婚もできない。…これら誤った改革を見直せば「今日より明るい明日」に向かうはずだが、そんな動きは聞こえてこない。過ちを犯した先輩達や勧めてくれたアメリカへの忖度もあるのだろう。自分の頭で必死に考えない病に陥っている結果である。


藤原正彦氏

◎ちなみに、藤原氏のこのコラムは、「深い洞察は常に一人の人間の呻吟により生まれる。話し合いにより数学者は定理を発見しないし、作曲家は曲を作らないし、作家は小説を書かないし、詩人は詩を作らないのである。」という名言で締められています。

公認会計士　黒　沼　　寛